

Ombra di Venezia

堀辰雄

青空文庫

きのふからギイ・ド・プウルタレスの「伊太利に在りし日のニ
イチエ」といふ本を読み出してゐる。忠實な傳記ではないかも知
れないけれど、なかなか面白い。いま讀んでゐるところは、ニイ
チエが三十六七の時、獨逸を去つてはじめて伊太利に赴き、先づ
最初ヴェネチアに滞在してゐた頃（一八八〇年三月―六月）の有
様を敘した一章であるが、ここに描かれてゐるニイチエの姿には、
これまであまりにも屢ニイチエといふ名の下に描かれてゐるデ
イオニソス的な人間とはかなり相違した、ずっと我々には親しみ
深く思はれるものがある。私はさういふヴェネチアにおけるニイ
チエの姿をプウルタレスから少し抄して見よう。――

ヴェネチアでは、ニイチエは、あるバロック式の古い館の、大理石を敷きつめた大きな室の中に住んでゐた。そこから聖マルコ寺院までは、埃のない、日蔭の多い、もの靜かな通りを、三十分位で散歩して來られた。ニイチエの大好きであつたヴェネチアの日蔭、——それは彼のその時書いてゐた本「モルゲンレエテ曙光」が長いこと「ヴェネチアの日蔭」(Ombra di Venezia)といふ題をつけられてゐたほどであつた。彼の生活は細心に規則的であつた。毎朝七時か八時頃から仕事にとりかかる。それから散歩と粗末な食事。二時過ぎになると、友人のペエタア・ガストがやつて來る。このペエタア・ガストといふ男は、バアゼル大學時代からのニイチエの教へ子で、いまは作曲家を志してゐる。ニイチエをヴェネ

チアに招んだのはこのガストであるが、いまはもうこの男だけが
ニイチエの忠實な友人であり、原稿の淨書やら、口授筆記やら、
病氣の世話やら、何から何まで面倒を見てやつてゐる。そのガス
トが暫らく一緒にゐてから歸ると、又改めて七時半まで仕事をす
る。すると再びガストがやつて來て、夕食を共にする。ときには
半熟の卵と水だけですましてしまふこともある。それから大概、
一緒にガストの家に行つて、代る代るピアノを弾き合ふ。ニイチ
エは自分で作曲したものを弾いたり、即興曲をやつたりする。ガ
ストはシヨパンに私淑してゐて、彼の曲ばかり弾いてゐる。この
ヴェネチア滞在の中くらゐ、ニイチエは音樂に親しんだことはなく、
そして彼はもはやシヨパンのみしか愛さなくなつてゐた。

シヨパンとニイチエ。——この二人の病人、この二人の純潔な情熱家、この二人のいたるところを漂泊する孤獨者の間には、魂の血縁といふやうなものがありさうである。この二人の中で和音をして顫動してゐるものは、先づ、生きんとする劇的な悦びであらう。それから更らに付け加へたいものは、懷疑の裡に仕事をすることの愉しき、——恐らくそれは、氣高い方法で苦しむこと、そしてそれを意識してゐること、それからまた、ありふれた光榮を約束させるやうな愚鈍な誠實さよりも寧ろちよつとした短い叫びの方を選ぶことの樂しみ、とでも云ふべきであらうか？ とプウルタレスは穿鑿してゐる。

ワグネルが「トリスタン」を作曲したのは矢張りこのヴェネチ

アであり、後年自らその作品は、「あの素ばらしいヴェネチアを音楽化したもの」であると言つてゐるが、ニイチエもまた、その「曙光」の中で彼のヴェネチアを音楽化してゐると言へよう。その内的なヴェネチアは、彼が散歩をしながらだの、カツフエに休んでゐる間だのに取つたさまざまなノオトの間から、まるで新しい歌のやうに聽えてくるのである。

後年、ニイチエは「この人を見よ」のなかに當時を回想しながら、かう書いてゐる。「一體私は音楽にいかなるものを欲してゐるかに就いて、最も選ばれたる讀者諸君のために一言したい。音楽は、十月の午後のやうに快活にして深いものであること。それは獨得で、奔放で、そして柔軟であり、可憐なる少女のごとく狡

くてしかも優雅であること。……由來、獨逸人のごときものに音樂の何たるかが解せられようとは私は思ひも及ばぬ。獨逸音樂家と稱せられてゐるものは、ことにそのうちの最も偉大なるものは、外國人である。スラヴ人か、墺太利人か、伊太利人か、和蘭人か、——或は猶太人である。さもなくば、ハインリヒ・シュツツやバツハやヘンデルのごとき優秀なる種族、今日では既に亡びたる種族の獨逸人である。私自身は、シヨパンのためになら他のあらゆる音樂を犠牲にしてもいいと思ふほど、自分が充分に波蘭土人であることを感じてゐる。私は三つの理由からワグネルの「ジイグフリード牧歌」を例外としたい。又、そのオオケストレエシヨンの崇高な抑揚によつて他のすべての音樂を凌駕してゐるリストの

或物、それから又、アルプスのあちら側で——今ではこちら側だが——生れたところのすべてのものも例外としたい。……私は口ツシニなしにはすまされない、又それと同じ位、音楽における私の南方、わがヴェネチアの大作曲家ペエタア・ガストなしにもすまされない。そして實は私がアルプスのこちら側といふのは、ただヴェネチアだけを指してゐるのである。もし私が音楽をそれで代用させるやうな一語を求めるとしたら、私はヴェネチアといふ一語をしか見出さないであらう。私には涙と音楽との區別をつけることは出来ないのである。……」

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第五卷」筑摩書房

1982（昭和57）年9月30日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄作品集 第四・晩夏」角川書店

1951（昭和26）年6月15日

初出：「文藝通信」

1936（昭和11）年6月号

※初出時の表題は「*Ombra di Venezia*——手帳より——」、「堀辰雄作品集 第四・晩夏」角川書店収録時「*Ombra di Venezia*」と副題がはずされる。

入力：tatsuki

校正：染川隆俊

2010年3月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

Ombra di Venezia

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>